

phraseology の観点から英語コミュニケーション教育と英文法の間係を考える

井上 亜 依
(防衛大学校)

1. はじめに

近年の大学英語教育は、英語コミュニケーションを中心としたものであり、それを達成するために様々なカリキュラムが生まれ、種々のテキストが出されている。そのテキストの中身について言及すると、インタラクティブな内容になってはいるが、文法中心の旧態依然とした内容が記載されていることは少なくない。そこで本発表は、フレーズが言語の根幹をなすと考えるphraseologyの説明よりはじめ、そのphraseologyに基づく英語コミュニケーション教育を紹介し、大学での英語教育実践を報告した。

2. phraseology (フレイジオロジー)について

最近、phraseology という用語の浸透が広まってきた。しかし、その実態と根本的な考え方は、広く知れ渡っているとは言い切れない。phraseology とは、字のごとく、フレーズについての学問であり、そのフレーズの定義は繰り返し使用される最低2語以上からなる語連結である。1点留意しなければいけないのは、フレーズの定義は研究者によって異なり、使用する用語も研究者によって異なる。今後は、phraseology の理論化が必要となる。

次に問題になるのは、なぜフレーズを研究するのかということである。私たちが使用している言語は、単語や文法規則を覚えてそれを組み立てて話したり、書いたりしているわけではない。状況に応じたフレーズを使用してコミュニケーションを行う。これは、幼児の言語習得を観察すれば顕著なことである。幼児は、親や周りの人間から聞いた言葉＝ある程度の語の塊をそのまま模倣することにより、コミュニケーション能力を発達させている。第二言語習得も同様である。海外のホテルでのチェックインの際、どのように言うのかは英単語と英文法では対処しきれない。状況に応じたフレーズを覚えておかないと英語らしさに欠けた発言となることは容易に想像できる。このように、phraseology は人間の言語の根幹をなすのは単語や文法ではなく、フレーズだと考える。文法というものは、単なるルールにしかすぎない。

このようなphraseologyの考え方は、決して近年のものではない。古くは100年以上も前、日本で英語を学習する人たちのために有効なのはフレーズ学習であると考え、それを辞書という形で出した。それ以降phraseologyは、辞書の中でフレーズをどのように記述していくかという形で今日まで実践的に発展してきた。それと並行して、科学的にフレーズを扱う研究もあったが、1980年代の大規模電子言語資料収集体（コーパス）により実証的側面からのphraseologyが活発に行われるようになった。

3. 大学生の現状とphraseologyに基づくテキストブック

筆者は、上記のphraseologyの立場に基づき研究・教育を行ってきたが常々頭にあるのは「教育と研究は乖離してはならない」ということである。フレーズ習得を主眼においた大学での英語教育を行うために大学生の現状を調べたところ次のようなことがわかった。基礎

的な文法力はあるが、英語に対する明確な目標設定がない、日常生活で使用するような単語を知らない、単語と単語を組み合わせたフレーズになると極端に理解度が下がる、ということである。このような現状を踏まえて、2008年に*Express yourself in English: A fresh start to your college life* (八木克正・Richard Hodson, 井上亜依, Sebastian Fuller, 英宝社)を出版した。このテキストは、ヨーロッパ言語共通参照枠の4つの言語領域(公的、私的、職場、教育環境)の教育環境での英語で、B1 レベル(threshold or intermediate) からB2(advantage or upper intermediate) レベルに相当する。

本テキストは、すべて英語で書かれており全14ユニットからなる。どのテキストブックでもあるように、Introduction to the ideas behind the textbook から始まり、How to use this textbook がある。そして、Unit 1 の前にUnit 0 Looking ahead: strategies and study habits analysis を設けた。ここでは、いきなり勉強に入るのではなく、各学習者の学習状態・状況を知ることが目的とする。その後Unit 1 からUnit 13 まで大学生活、身の周りのことなどに関連したトピックを扱っている。各ユニットは、Opening dialogue, Vocabulary and key phrases, Practice to put vocabulary into context, Reading with questions and phrase-finder, Follow-up practice, TOEIC-style preparations questions から構成されている。Unit 1-7 では、Talking about yourself, college life, plans and goals を扱い、Unit 8-10 はおそらく大学生が一度は体験するであろう海外旅行を想定してPreparing for and taking a trip abroad とした。Unit 11-13 はIntroducing Japan to overseas friends とした。Unit 14 はReview としてこのテキストを勉強したこと、学習する習慣をセルフチェックする項目を設けた。

4. phraseology に基づく大学での教育実践報告 -防衛大学校の場合

ここでは、3節で説明したphraseology に基づくテキストブックを使用して授業をした実践報告と、テキストを使用せずにphraseology に基づく授業報告をする。

4.1 テキストを使用した1年生の場合

年間30回、半期各15回の最初の授業で、クラスの目標、CEFR の5技能(spoken production, spoken interaction, listening, reading, writing) の能力のうちspoken production, spoken interaction, listening を通してB1/B2(independent user) を目指すということ述べ、その後、各学生の授業目標を設定してもらう。半期の最後の授業日に初回の授業目標に到達できたかどうか自己評価してもらう。

授業内容は、クラスでの発表を行い、2ユニットが終わるたびに小テスト(選択問題一切なし)を実施した。学期末試験は、口述試験+筆記試験とした。授業アンケートでは、「英文法が必ずしもすべてではないことがわかった」、「必要最低限の英文法とフレーズを多数覚えることで、英文理解だけでなく話せるようになった気がする」などの肯定的な意見があった。

4.2 テキストを利用していない4年生の場合

1年生と同様に、年間30回、半期各15回の最初の授業で、クラスの目標「英語を的確に理解し使える幹部自衛官を目指す」と述べ、CEFR の5技能(spoken production, spoken interaction, listening, reading, writing) の能力のうちspoken production, spoken interaction, listening を通してC1/C2(proficient user) を目指すことを説明した。また、本授

業では、4つの言語領域（公的、私的、職場、教育環境）のうち、職場＋教育環境の英語を学ぶことをも述べた。

通常授業では、大学1年間の行事、身の周りのこと（英英辞典の付録）に関する英単語、フレーズを利用して教育環境の英語力向上を目指した。職場の英語は、映画『プラダを着た悪魔』を利用し、映画に出てくる単語、フレーズを学習、発音練習、単語、フレーズを使用して会話運用能力向上(input, output 両方)を目指した。そして、こちらで場面設定をして、学生にその場面に関連のあるフレーズを調べ、それらを使用して自由に英作し、発表してもらった。それだけではなく、毎週、英英辞典の付録の単語＋フレーズ（映画に出てくるもの、あいさつなど）のテスト（選択問題一切なし）を行い、月1回の小テストをも行った。学期末試験は、リスニング試験＋記述試験とした。授業アンケートは、「小テストばかりでつかれたが、たくさんフレーズを覚えた。今後使えそう」、「これまでの英語の授業とは異なり楽しかった」などの肯定的な回答が多かった。

5. 結語

phraseology に基づくテキストブックを作成し、それを大学での英語教育で実践してきたが、学生からの反応は肯定的なものだった。その理由は、行動中心主義に依ったため授業内容・目標が明確となり、コミュニケーションを図るにはどのような方法がよいかという自律学習能力を備え、それを生涯学習につなげることができたためと考える。また、本シンポジウムのテーマである「日本での英語コミュニケーション教育の中で英文法をどうとらえるのか」という問いに対しては、必要最低限の文法力だけで十二分であり、それより重要なのはフレーズ力である。